

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「米国薬剤師の活躍から感じた今後の日本薬剤師
の可能性」

研修期間：平成 26 年 2 月 22 日～3 月 9 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

0909733121

鎌田 理紗子

大学の講義でアメリカの薬剤師についての話を聞き、アメリカの薬剤師の職能の広さにとても興味を持った。5年次に行った実務実習を踏まえ、日本とアメリカの医療の違いを実際に自分の目で見て学び、自身の将来や今後目指していくべき薬剤師のあり方について考察したいと思い、研修に臨んだ。

平成26年2月22日から3月9日に行われた2週間の研修では、南カリフォルニア大学（USC）とその関連医療施設を見学し、USCの学生と共に講義を受けた。

アメリカと日本では、薬学教育制度に大きな違いがある。アメリカでは高校卒業後4年制大学に通った後に、4年制課程の薬学部（Pharm.D.）に進学する。早期から臨床的な内容を学び、1年次から医療現場での実習を行い、4年次には6週間ずつ6か所の医療施設でクリニカルクラークシップを行い、卒業までに最低1740時間の臨床経験を要する。日本の薬学部での臨床経験は、1年次の早期体験実習（2日間）と5年次の11週間ずつの薬局と病院での実務実習のみであり、学生のうちの臨床経験時間に大幅な違いがある。さらにアメリカの4年次のクラークシップでは、薬学生は指導薬剤師のもと、自身の判断で最終確認以外の業務を行っており、より実践的な実習を行っているように感じた。将来の薬剤師である薬学生の教育は重要であり、薬剤師として働くという意識を持つことができるような教育の必要性を感じた。薬学生に対して早期から実際の医療現場を体験したり、薬剤師から話を聞くなどの機会を増やしていくと良いのではないかと感じた。

まず私は、QueensCare Family Clinicsというクリニックを見学した。ここでは、日本と大きく異なる点として、薬剤師が診察室で患者と面談を行っていた。慢性疾患患者では、早くても3か月に1回程度しか医師の診察がなく、その間の薬物治療の管理を薬剤師が行うため、定期的に患者面談を行い、定められたプロトコルに従い、薬剤師の判断で投薬をする。薬剤師として、より責任とやりがいがあるように感じた。今回、クラークシップの4年生と一緒に患者情報を確認し、学生が患者と面談をする様子を見学した。コンプライアンスや副作用の確認はもちろん、合併症の確認、食事療法や運動療法が必要な患者では、食事内容や運動量についても具体的に聞いており、それに対するアドバイスも細かく行っていた。また、糖尿病患者では血糖自己測定記録を確認し、異常な数値があると、その原因についても詳しく聞き取りを行っていた。このように1人1人の患者にじっくりと時間をかけて面談を行っており、患者や他の医療従事者からの薬剤師の信頼が確立しているのだと感じた。今後、日本ではますます高齢化が進み、慢性疾患患者の増加が予測されることから、よりきめ細やかな医療を提供するためにも薬剤師の専門性を生かして将来このようなシステムが出来ると良いと思った。

次に、地域薬局であるEl Monte Pharmacyを訪問した。アメリカでは、ボトルによる薬剤交付が一般的であり、ボトルには患者氏名、薬剤名、用法用量、作用、副作用が記載されていた。また、リフィル処方せんに基づく調剤も行われていた。リフィル処方せんとは、リフィル可能な薬剤、リフィル回数、1回あたりの処方日数などが定められた上で、処方せんを繰り返し利用でき、毎回の医師の診察なしで薬剤を提供できる制度である。主に慢性疾患のリフィル処方せんがあり、薬剤師が有効性、安全性モニタリングを行い薬物治療に介入している。この点は、日本と大きく異なる点であり、アメリカの薬剤師の職能の高さと信頼、責任の大きさを感じた。

次に大学病院である Keck Medical Center of USC、がん専門の Norris Cancer Center に訪問した。薬剤の提供には、薬剤師による処方監査の後、薬剤の調製はテクニシャンという調剤助手が行っており、最終鑑査を薬剤師が行っている。テクニシャンは抗がん剤の調製も行うことができる。調剤をテクニシャンに任せることで、薬剤師はより本来の業務に集中出来るようになる。病院では薬剤師がいなかったらラウンドが始まらなかったり、電話がかかってくるそうで、アメリカの薬剤師はチームの中で重要な役割を果たしているということがうかがえた。薬に関しては薬剤師という認識が他の医療従事者にあり、信頼関係が築けているように思えた。

サンタモニカにある Santa Monica Homeopathic Pharmacy を訪問した。こちらの薬局では主にハーブを取り扱い、ホメオパシー療法を行っている。ホメオパシーとは、症状を抑圧するのではなく自己治癒力を喚起させることを目的とする自然療法のことである。自然由来のものを用い、服用量も少量であるため、安全性が高いとされている。本来ハーブは、葉の状態で保管し、服用する前に煎じて飲むのが良いとされているが、アメリカ人の性格やライフスタイルからも服用しやすく持ち歩きも便利な錠剤が好まれるため、ほとんどが錠剤に加工されて販売されていた。様々な患者が来局し、薬剤師のアドバイスのもと、ハーブや fish oil、ビタミンなど適切な薬剤を選択していた。

今回の研修で、USC の学生と一緒に授業を受けて、教員の問いかけに対して挙手をして発言をするなど、とても積極的に授業に参加していると感じた。また話をしてみて、薬学生としての意識やモチベーションの高さを感じ、さらに薬剤や疾患に関する知識を豊富に持っていた。4年大学を卒業後さらに薬学部に進学するというシステムからも、意識の高い学生が多いのではないかと思った。

研修に参加し、日本とアメリカの医療、薬剤師の違いを学ぶことができ、今後の日本の薬剤師の可能性に気づくことが出来た。アメリカの薬剤師は日本の薬剤師とかけ離れて違うものではなく、日本でも同じように行っていることもあれば、衛生面のように日本の方が配慮が細かくされていて良い点もあった。アメリカの良いところを知ると同時に、日本の良いところも見つけることが出来たと思う。今後、日本に取り入れていくべきところを少しずつ取り入れていけるように努力していくことが大切だと思った。USC の Wincor 先生の「日本での薬剤師の活躍の場を広げていくために、誰かがやるのを待つのではなく、みなさんが先駆者となって下さい。」という言葉が印象に残っている。患者や他の医療従事者からより信頼される薬剤師となるために、薬剤師の専門性を生かして出来ることを積極的に示していき、医療における薬剤師の必要性を示していくことが大切であると実感した。さらに薬剤師として薬物治療に対して責任を持つことも重要であり、そのために今後私たちも自分たちの出来ることから努力をしていこうと改めて感じた。

大変充実した 2 週間を送ることができた。このような貴重な機会を与えて下さった南カリフォルニア大学の先生方、引率の山口先生、そして共に研修を行ったメンバーに感謝したい。